

第30回 今回はイヌの眼球に発生する虹彩毛様体腺癌に関する報告

今回はイヌの眼球に発生する虹彩毛様体腺癌に関する報告です。虹彩毛様体腫瘍はイヌの眼球原発腫瘍で、メラノーマに次いで二番目に多い腫瘍です。

Metastatic iridociliary adenocarcinoma in a labrador retriever.

Vet Pathol. 2007 Sep;44(5):672-6. Zarfoss MK, Dubielzig RR.

症例；15歳齢、避妊済み♀、ラブラドル・レトリバー

臨床；数年間に亘る左眼の白内障。更に6ヶ月間に亘って左眼のブドウ膜炎と緑内障を併発。緑内障治療のために硝子体内にゲンタマイシン注入。

その二ヶ月後、虹彩が肥厚し眼球摘出となる。眼球摘出の9ヶ月後に昏睡状態に陥り、眼摘された同側鼻腔から膿汁排泄、胸部レントゲンでは肺に多発性結節が認められ安楽死。

その他、生前に線維性エプリスと脂肪腫、不完全切除された低悪性度の悪性神経鞘腫と完全切除された肛門周囲腺腫の既往歴あり。

剖検所見；左眼窩内における腫瘍細胞の再発病変と肺における多発性結節病変が認められた。その他の各臓器に異常は認められなかった。

眼球腫瘍の組織所見と免疫染色結果；

眼球内において多形性で乏色素性の細胞塊が不規則な索状構造を形成しながら増殖。部位によりPAS陽性基底膜様物質を産生する上皮様の腫瘍細胞が認められた。

これらはN/C比が増加しており、1-数個の核小体を有し、顕著な核の大小不同と退形成性を示していた。核分裂指数は8であった。また後眼房はコラーゲン豊富な紡錘形細胞の腫瘍性増殖で満たされていた。腫瘍細胞は視神経周囲の強膜にも強い浸潤性を示していた。

腫瘍細胞は間葉系細胞のマーカーである vimentin 抗体にび漫性に陽性、またS100抗体とNSE抗体にも陽性。5-10%の腫瘍細胞が上皮系細胞のマーカーであるAE1/AE3に陽性であった。

眼窩内に浸潤した腫瘍と肺転移した腫瘍の組織所見と免疫染色結果；

いずれも紡錘形を呈する腫瘍細胞の増殖からなり、後眼房に主座する腫瘍細胞に類似していた。

腫瘍細胞は間葉系細胞のマーカーである vimentin 抗体にび漫性に陽性、またS100抗体とNSE抗体にも陽性。眼球内腫瘍とは異なり、上皮系マーカーのAE1/AE3に陰性であった。

ヒトではイヌと異なり虹彩毛様体に由来する腫瘍は非常に少ないようです。

他の論文報告によりますと、正常な眼球の虹彩毛様体色素上皮と良性腫瘍である虹彩毛様体腺腫は“上皮”と呼ばれつつも、上皮系マーカーのAE1/AE3には陰性であり、間葉系細胞のマーカーである、vimentin 抗体に陽性を示すことが知られています。腫瘍細胞が強膜等へ浸潤性を示した場合（悪性所見が生じた場合）には、上皮系細胞のマーカーを発現してくると言われており、この免疫染色の結果が良悪を区別するポイントであるとの報告もあります。

また、ヒトの虹彩毛様体腫瘍は外傷（眼球内外科手術を含む）や眼球内の炎症、結核等と関連して生じると言われています。本症例における、紡錘形腫瘍細胞の出現は硝子体へのゲンタマイシン注入による眼球内に生じた炎症反応が腫瘍の形態変化に影響を与えたのであろうと考察されています。また悪性であれば上皮系細胞のマーカーに陽性を示すようになるはずだが、再発、転移病巣で陰性であったのは、腫瘍細胞の退形成性が更に進んだためと考察されています。

ヒトにおいても獣医領域においても、この腫瘍の良悪の明確な区別（境界）は今のところ、まだはっきりしていません。イヌでは悪性と診断されても再発や遠隔転移をしたという報告が、これまでほとんどありませんでした。

また、この腫瘍はレトリバーに好発するという論文報告もあります。弊社でもイヌの虹彩毛様体腺癌が11例診断されていますが、4例がレトリバーでした。再発や転移したとして検体が送付された経験は今のところありませんが、今後予後等を含めて調査等を実施できたらと思います。

パソラボ